

障害者との共生に関する大学生の 意識に関する研究（1）

豊 村 和 真

障害者との共生に関する大学生の意識に関する研究(1)

豊村 和 真

目次

問題意識と目的

障害者についての大学生の意識(イメージ)

研究の問題点について

健常者との比較

結果の再現性について

質問紙について

方法

[被験者]

[手続き]

結果と考察

健常者と障害者の比較

回答の安定性について

期間別回答期間の影響について

問題意識と目的

障害者についての大学生の意識(イメージ)

研究の問題点について

広い意味での障害者に関する大学生の意識あるいはイメージについては、相当数の先行研究がある。

筆者らも、横断的に検討を行った豊村ら(2008;2009)等、相当数の報告をしているが、自分の研究を含めそれらの研究のほとんどについて研究法的に2点の重要な点が欠落している。

健常者との比較

その第一点は健常者との対比がなされていないという点である。従来の研究では障害者に対する意識またはイメージを調査してもそれが健常者と比較してどうか、という視点に乏しいように思われる。障害者に関しての質

問の回答の値を即、障害者に対する意識とすることは不適切である。例えば、「障害者と共生する場合にもっとも重要な要因をあげてください」という質問があったとする。この時回答として「良い人格」と答えたとしよう。しかし健常者と共生する場合にも全く同内容の回答「良い人格」が得られたとすると、障害者に対する回答とはいえず、他人一般に対する回答にすぎないことになる。

この問題点を克服するためには、同じ質問を健常者の場合と障害者の場合の両方について行い、その差をもって障害者に対する意識と考えるという方法が考えられる。

そのために、健常者に対する値(以後対健常者値)から障害者に対する値(以後対障害者値)を引いた値を純粋な障害者に対する意識度の値(純意識得点)とすることが考えられる。すなわち、

純意識得点 = 対障害者値 - 対健常者値
とするのである。

本報告では上記の3つの値について報告する。

結果の再現性について

第二点は、1回限りの調査でそれらの結果が正しいといえるのかという点である。いわゆる再検査信頼性であるが、この再検査信頼性についてはあまり考慮されていなかったと思われる。当然ながら信頼性の低い検査は妥当性も必然的に低くなることから、この点の検討は障害者に対する意識(あるいはイメージ)研究では重要であるにもかかわらず、ほ

とどなされたことがないように思われる。

再検査信頼法については、2 回の検査の間隔が重要である。間隔が短かすぎれば、1 度目の結果を記憶してそれに左右される可能性が生じ、長すぎれば、成熟の脅威など他の要因の影響が大きくなる。

したがって、その間隔を複数設定する必要がある。

質問紙について

通常はリッカート法により障害者に対する意識を扱う研究が大半であるが、他に注目すべき手法として全概念法（コンジョイント分析）による質問紙がある。コンジョイント分析は、項目間の重要度を比較できる、各要因の水準がどのように評価されているかがわかる、各要因各水準の組み合わせをシミュレートできる（真城, 2001）という特徴に加えて、個人ごとの結果の部分効用値の信頼性についても同時に得ることが可能である（真城, 2001）。

本報告の目的は、障害者についてだけでなく健常者についても同時に調査を行うが、その際、リッカート法および全概念法による2種類の調査用紙を用いて、さらにこれらの調査を時間間隔を変えて2度ずつ実施する。これにより、問題意識で述べた2つの問題点—障害者に対する意識のみ調査し健常者に対する意識との比較がない、再検査信頼性が検討されていない—を克服することを目的とする。なお、本報告ではその導入部分と、結果の一部のみを報告する。

方法

〔被験者〕

大学1年生の後期の講義の中で配布した以下に述べる質問紙調査において、全項目に回答した学生のみを対象とした。2009年度と2010年度の2回のデータを使用した。

2009年は男子学生16名、女子学生52名、2010年は男子学生13名、女子学生53名で合計134名であった。

〔手続き〕

一回目の調査は全員一斉に行った。その後4グループに分け、1週後、4週後、8週後、11週後に同じ調査を行った。

調査用紙は、学年性別等のフェイスシートに加え、教示文は以下の2種類とした。健常者については「あなたの住んでいる地域に、架空人物Aという人が住んでいます。同じ地域で暮らしていく上であなたは以下の内容をどの程度重視しますか？」とした。また、障害者については下線部分を「架空人物Bという障害を持った人」に置き換えた。

質問項目は、2007年に30名を対象にして、障害者および健常者と共に地域で生活する場合に重要な要素は何かという予備調査によって得られた7項目を採用した。それらは、「積極的に社会に参加している」(社会参加)、「理解できない行動をとることがある」(理解不能)、「見た目に良い印象を受ける」(見た目良)、「年齢は子どもである」(年齢低)、「能力が高い」(能力高)、「性格が良い」(性格良)、「人に危害をくわえるようなことはしない」(危害無)の7項目であった。なお()内の太字の表現は本報告で使用する略記である。これらの項目について、(1)全く重要でない(5)～非常に重要であるの5件法で質問した。

なお、これらの項目の並びは対健常者用と対障害者用で順番は固定であるが、異なっていた。

結果と考察

健常者と障害者の比較

各項目の回答を数値と見なし、分析を行った。全体的な結果を表1に示す。表1の健常

１は対健常者値１回目の全平均値である。同様に障害１は対障害者値１回目、健常２は対健常者値２回目、障害２は対障害者値２回目の全平均値である。

表１ 健常障害別各質問項目の平均値

	社会参加	理解不能	見た目良	年齢低	能力高	性格良	危害無
健常1	3.29	3.82	3.35	2.37	2.75	4.13	4.79
障害1	3.18	3.24	2.81	2.46	2.55	3.64	4.31
健常2	3.06	3.90	3.34	2.31	2.62	4.19	4.74
障害2	2.81	3.34	2.70	2.30	2.41	3.65	4.43

□ = 2 群間に有意差あり

１回目で対健常者値と対障害者値間で比較の差が大きかった（0.4以上）のは、理解不能、見た目良、性格良、危害無の項目であった。

同様に２回目も理解不能、見た目、性格良、危害無の項目であった。以上の項目はすべてt検定で１％未満で有意に対健常者値が対障害者値を上回った。

すなわち全体としては、隣人として暮らす場合には、障害者と健常者とを比較すると、障害者に対してやや許容度が高いという結果が得られた。

回答の安定性について

被験者ごとに対健常者値と対障害者値それぞれの１回目と２回目の回答の差の二乗和をとり、反応の安定性とした。その値を表２に示す。

表２ 回答の安定性（１回目と２回目の差の二乗和）

	社会参加	理解不能	見た目良	年齢低	能力高	性格良	危害無
健常	1.08	1.27	1.40	1.30	1.22	0.55	0.29
障害	1.19	1.48	1.40	1.28	0.96	1.10	0.63

■ = 安定 □ = 2群間に有意差

表２の値は小さいほど回答が安定していることを示す（１回目と２回目の全項目で同じ

値を示せば０になる）ので、対健常者値では性格良と危害無が安定していた。同様に対障害者値では能力高と危害無が安定していた。逆に安定していなかった項目は、対健常者値では見た目、対障害者値では理解不能と見た目であった。

対健常者と対障害者間で有意差（１％未満）が見られたのは、性格良、危害無の２項目であった。

全体としてはおおむね５件法で１段階程度はゆらぐことが示された。

なお、通常は再検査信頼性は相関係数で表示することが多い。今回は項目数が少ないこともあり、差の二乗値を持って信頼性の指標としたが、相関係数については以下の通りであった。

対健常者の１回目と２回目の相関値は0.679、１回目の対健常者と対障害者の相関値は0.636、対障害者の１回目と２回目の相関値は0.632、２回目の対健常者と対障害者間の相関値は0.693であった。これらの値は全て１％水準で有意であった。

期間別回答期間の影響について

対健常者値と対障害者値別に各７項目の二乗和を被験者ごとに計算した値の平均値を、期間別（１週、４週、８週、１１週）に求め、これを期間別の回答の安定性として表３に示した（７項目の二乗和であるから、表２の約７倍くらいの値になる）。

表３ 期間別の回答の安定性について

	１週間	４週間	８週間	１１週間
健常	6.86	6.83	7.78	6.91
障害	7.00	8.67	7.94	8.39

全体としてみると一定の傾向が見られないように思われた。

今後はこれを年別、性別、項目別に検討を行ない、その詳細について検討する必要がある

ると思われる。

試みに男女別に期間別年次別の対健常者値と対障害者値をプロットしたのが、図1（男子学生）と図2（女子学生）である。

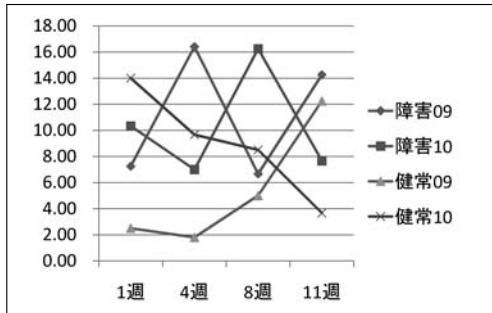


図1 期間別男子学生の回答の安定性

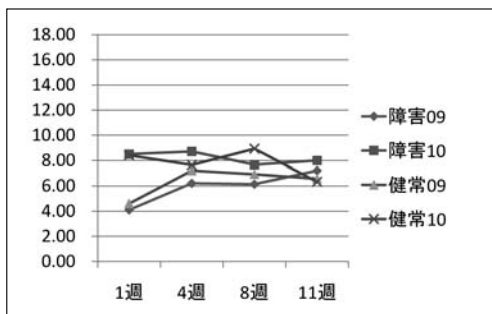


図2 期間別女子学生の回答の安定性

これらの図では、男子学生と女子学生の結果が相当異なることが示された。一般に男子学生の値は大きく、回答が安定していないが、女子学生の値は小さく回答は安定していることがわかる。

性差も大きいが年次差が比較的明瞭に出ている。図1から男子学生は対障害者値では期間が開くことと対応関係はみられないが、対健常者値は期間が開くと漸増（09年度）または漸減（10年度）している。図2から女子学生は対障害者値と対健常者値は同じ傾向を示し、期間が開くと微増（09年度）、ほぼ一定（10年度）という関係があるように見える。

年次の違いについては、今後2011年度のデータ等を追加し、このような明瞭な差が見られ

るかどうかを検討する必要がある。また性差についても同様の検討を要する。さらに項目別に何らかの特徴が見られるのかを検討する必要がある。

【引用文献】

真城知巳 2001 SPSS によるコンジョイント分析-教育・心理・福祉分野での活用法 東京図書

豊村和真・佐藤真衣子 2008 障害者に対する態度に関する横断的研究（1）北星論集 第45号 1-13

豊村和真・笹尾絵梨 2009 障害者に対する態度に関する横断的研究（2）-受容的態度と関連する知識項目に関する検討- 北星論集第46号 1-14

豊村和真 2011 障害者との共生に関する大学生の意識に関する研究 日本応用心理学会 第78回大会 発表論文集

[Abstract]

A Study on the Consciousness of Symbiosis of University Students and Handicapped Persons

Kazuma TOYOMURA

Consciousness about the symbiosis with the handicapped person of the freshman was investigated. The subject was made to reply two kinds of questions paper at the same time. The subject was separated by four groups after that. Each group (one week later, 4 weeks later 8 weeks later, 11 weeks later) was made to reply a question paper twice.

The reexamination reliability was almost good. And, the freshman was shown to be permissive to a handicapped person than a common person.

